

丸雪小雪（上）

泉鏡花作

明治三十二年五月

風流翁

小日向臺町鼠坂の上に庵して、杉雪といひたる、
亡き母の叔父なる人あり。其の母もあらず、父もみ
まかりたるに、代りて一片の赤心を陳べむとて、先
生を乞ふこと切なりけり。

去年の夏のはじめ、われを率て行き給ひぬ。爾時、

此庵や少し早い風薫る

と興じて與へたまへり。われはたゞ、枸杞の新茶、
煎餅の好きなおぢいさんと甘えしのみ。老なる人のい
かに嬉しかりけむ、相見る度、より／＼にいひ出
で、名家の風采を稱へしが、おなじ年の師走二十
六日といふに年七十有三にしてみまかりぬ。

其硯箱そのすゝりばこの奥おくに「この庵いほり」の句くを更さらに手寫しゅしやした
るに、

若葉わかばにもれぬ杉すきの古垣ふるかき

とわきをものせしがありて、あとにて見出みいだされぬ。
生前せいぜんにはいはぎりし、あはれ師しの名なを知しれるより、
餘あまり差出さしいでやせむと控ひかへしなるべし。この事聞こときこえし
かば、よくつけられしよ、とのたまひぬ。さばかり
嬉うれしかりけむも一ひとツはわれをいとほしめばなり。

いま杉雪さんせつの姪めひなる人ひと、一人庵ひとりいほりを守まもりて、あとを弔とむら
ひつゝ、

山里やまざとは手向たむけの水みづも薄氷うすこほり

となむ、われは唯涙たなみださしぐまる、斜汀しやてい悼いたんで曰いはく、

菊きく枯かれて其後そのちあき翁庵いほになし

音おともなく雪ゆきに老樹おいきのたふれけり

あへてこゝに句くの巧拙こうせつを論ろんぜむや。

言語

言語は謹むべしと、こゝに言ふまでもあらず、口説もやり過すと愚痴になるべし、知友あり、極めて謹巖の人なり。嘗てなにがし氏を入れて室とし一女を擧ぐ。這へば立て、立てば歩めの頃と覺し、曰くいろ／＼厄介なものです、三角形の口をあけて莞爾々々してるのを見ると、可愛いもんですと、蕪村が、鶯のなくや小さき口あけての趣ならむがいわれに於て何かあるべき。ガキなんざうるさいぢやありませんか、小鳥の方が餘程好いよと、其の人憤れる色ありき。年を経て、冬の日、僕曰く、今年は戌の年だつて馬鹿に一方々「はう／＼」に子が出来るよ、大根と一緒にあたり年ださうだと、知らざりき細君いはた帯してあらむとは。次に相見し時、細君臥床に横はれり。何うしたの、六月で流れたのだと、愁然たり、質ぢやアあるまいしといびしが、中惡くなりぬ。

のろけ箱

手紙が来たのが三錢、手紙を出すのが五錢、いゝ人が来ると十錢、此方から運ぶもおなじ、すべて逢ふ時は此の規定に従ふ、うつかり獨言をいふのは何に困らず引くるめて一錢、最低額にして、「アカンプが欲しいねえ」といふのが一番お安くはないのなり、三十錢。世帯を持ちたいといふのが二十錢。其他岡惚が二錢で、むかしのいるが四錢、なほ考ふべし。これを箱に入れて養育院に寄附しようといふことさ。猪八戒が聞いて来た、等により額に差あるもの悟空、三藏といへども其のいはれを解せず。沙和尚の曰く、からのろけは皆でいくらかづゝ喜捨して之を慰むべし、寸法違で、のせられたるは、有金ひツさらつて剩錢を出さぬことにせむと、恰も此時、四衆金鏡に装られて爲す所を知らず。